

令和8年10月2日（金）

魚沼きこえの教室だより

令和8年度 第6号

長岡聾学校小出分教室（小出特別支援学校内）

きこえの教室 担当：小池 豊

〒946-0035 魚沼市十日町 1738-2

TEL:025-792-5462 fax:025-792-5465

Email:koike.yutaka@nein.ed.jp

情報アクセシビリティ

日頃より難聴児童生徒へのご理解とご支援、本当にありがとうございます。

今回は、聞こえにくさについて、「情報」という観点から考えてみたいと思います。

どうすれば分かりやすい授業になるかについて、心理学の視点から分析をした著書『わかる授業の心理学』には、次のように書かれています。



授業の中では、大量の「情報」が流れる。

教師から子どもへ、子どもから教師へ、子どもから子どもへというように、情報が入り乱れて交流している。

さらに、教科書などの教材からも、子どもへ大量の情報が伝えられている。

わかりやすい授業とは、このような情報交流がスムーズに行われる授業である。

つまり、「情報」と聞くとつい ICT 教育のような発想になりがちですが、ここでいう「情報」とは、教師の説明や子どもたちの発言といった言語情報、あるいは、教科書や学習プリント、タブレットなどの文章や視覚的な情報のことを指します。それらの情報が相手にきちんと届いて、初めて「分かる」ということです。そして、授業では様々な情報が入り乱れるため、教師は情報を整理したり、スムーズに届くように工夫したり、届いたかどうかを確認したりしなければならないというわけです。教師として当たり前の心構え、スキルとも言えますが、子どもの多様な実態や多忙化の現実などから、つい疎かになってしまいがちということはないでしょうか？ **集団の中に難聴児がいればなおのこと、他の子どもたちと同じように情報にアクセスできたかどうかをチェックしていただければと思います。** 次の例は、情報アクセスの工夫例です。ぜひ参考にしてください。

情報アクセシビリティの例（確実に情報を届けるひと工夫）	YES	NO
① 説明や指示をする際は、全体に静かにするように呼び掛けている。		
② アイコンタクトをとり、子どもたちの反応を見ながら話をしている。		
③ 見る・読む・書く・作るなどの「作業」場面と、「説明」場面を分けている。		
④ 子どもたちの発言を、教師がもう一度分かりやすく繰り返している。		
⑤ ネームプレートを使い、発言を簡潔にまとめて板書している。		
⑥ 教科書やノート、資料などを電子黒板などで写しながら、説明をしている。		
⑦ 難聴児が対話的な学習に参加できるように、具体的な手立てを組んでいる。		



いくつかの小学校で、【理解の確認】を丁寧に行っている実践を参観しましたので、最後にご紹介します。その授業では、上のような工夫をしつつ、「今の教え方で理解できたかどうか」を必ず問われていました。そして、分からないと答えた子どもたちを黒板の前に集め、図解や身近な例を使ってもう一度説明し直すという実践です。「みんなに分かって欲しい」と願い、子どもたちと真摯に向き合う姿が印象的でしたし、「分からない」と素直に言える関係性が何よりも素敵でした。